

Campus Today



河北医科大学の学生が本学病院で臨床実習

**日本の歯科医療教育システムに理解を深め
両大の友好交流の歴史に思いを馳せる**

9月9日（月）から13日（金）まで、本学の姉妹校である中国河北省の河北医科大学より口腔医学院第5学年の学生6人が本学病院で5日間の臨床実習を行った。この実習は、2015年から続く両校の学生交流プログラムの一環であり、新型コロナウイルス感染症拡大による中断があったが、今回5年ぶりに再開された。学生たちは病院の歯科診療各科を見学し、日本の歯科医療教育システムへの理解を深め、文化交流を体験した。

実習初日の9日（月）には、創立30年記念棟で実習開始式が執り行われ、宇田川信之歯学部部長らが河北医科大学からの教員と学生を温かく迎えた。引率者である河北医科大学国際交流処の呉為先生は「今回の実習は日本の先進的な歯科医療教育や臨床技術を学び、日本の伝統文化や、両校の40年近い



栗原教授（中央）によるインプラント手術の様子をモニターで観察する学生たち

り、診療の進め方やコミュニケーションの丁寧さが、子どもの心理状態によって配慮されていることが説明され、学生たちは興味深く聞いていた。

10日（火）には、歯科麻酔科で澁谷 徹教授の指導のもと、学生たちは手術室に入り、全身麻酔を見学した。挿管の迅速かつ繊細な作業に感銘を受け、全身麻酔下歯科治療の複雑さと重要性を実感した。その後、口腔外科では栗原祐史教授の案内で病棟を見学し、特別専門外来ではインプラント手術の様子をモニターで確認し、骨の状態に応じて最適なインプラントのサイズやタイプを選択し、埋入する様子を観察した。実際の臨床で最新技術がどのように活用されているのかを学び、教科書で学んだ知識を臨床現場で深く理解する機会となった。

11日（水）には、補綴科や保存科、地域連携歯科、歯科放射線科などの診療科を見学し、担当歯科医師から診療の流れ、機器操作、材料管理や感染対策について詳しい説明を受け、学生たちは積極的に質問し、日本の歯科医療システムと各診療科の特徴について理解を深めた。

10日夜にはフレンチレストラン雷鳥で両校の学生による交流会も行われ、リラックスした雰囲気の中で学習経験や日常生活について意見を交わした。さらに、12日（木）には文化研修として、松本城や上高地を訪問。日本の自然の美しさと歴史文化を堪能した。

40年以上に渡り医療人材養成に貢献 河北省衛生健康委員会訪問団が来学

9月10日（火）、中国河北省より河北省衛生健康委員会の段云波副主任を団長とした訪問団一行5名が本学を来訪訪問した。

1983年、本学は河北省衛生健康委員会（旧河北省衛生庁）と友好協力協定書を締結して以来、41年に渡る交流を続けてきた。1984年から研修生として受入を開始した河北省内歯科医師は70名にのぼり、帰国後は衛生行政部門・教育部門・臨床医療部門などで中核として活躍するなど、本学は河北省内の医療人材養成に貢献してきた。

2020年からの新型コロナウイルス感染症、昨年の河北省内における土石流災害により双方の往来は中断していたが、今回は2015年以来実に10年ぶ

り、今回の実習に参加した高松 友之さんは、「実習を通じて日本の口腔医療に対する新たな知識を得ました。特に物品管理や障がい者治療など中国ではまだ普及していない分野を学ぶことができたのは大きな収穫でした」と語った。

呉先生は総括の中で、「学生たちに日本の先進的な歯科医療技術を学ぶ貴重な機会となっただけでなく、両校の長年にわたる友誼の心をさらに深めるもの

科大学の名前は数えきれないほど聞いてきたが、今回ついに訪問する事が出来大変嬉しく思います。40年以上に渡る交流の中で貴大学が河北省の衛生人材養成になされた貢献は顕著で、ここで学んだ研修生は帰国後衛生部門の要職に就いている。創立者の矢ヶ崎康先生をはじめ、松本歯科大学の全教職員に感謝を伝えたい。」と述べた。また、高松先生は「河北省では2020年に65歳以上人口が1038万人を超え総人口の14%に到達し、日本一の長寿県である長野県を参考に、今後は介護、リハビリ、高齢者に対する口腔ケアなど高齢化する社会のニーズに答えられる人材養成をめざすと話した。

段副主任は矢ヶ崎理事長からの心のかもった挨拶を受け、用意していた原稿には目を通さず、「30年以上に渡り河北省衛生健康委員会が勤務し、松本歯



創立者矢ヶ崎康像の前で記念撮影する訪問団

と交流し、12日（木）には銀座8丁目クリニックを見学した。院長の矢島安朝特任教授は大学が都心で医療サービスを提供する役割を丁寧説明した。同行した河北医科大学口腔病院の馬哲院長は、「日本の医療分野は大変細分化されており、歯科医師や歯科衛生士の役割が明確である。現在中国でも歯科衛生士制度の導入を検討しているので、我々も参考にしたい。」と話した。一行は5日間の日程を終え、帰国の途に就いた。本年10月には本学歯学部が河北省を訪問し臨床実習を行う予定である。今後の更なる交流活動が期待される。

（法人）対交関係室 副主幹 酒井康成

さらば、首相官邸。

永田町生活52年の最後に思うこと

内閣官房参事 松本歯科大学常務理事 飯島 勲 特命教授

今月号は「プレジデント」10月18日号「リーダーの掟 飯島勲」より、自民党総裁選と拉致問題についての記事を要約して紹介します。

9月27日は、自民党の新総裁が決定する日でもある。私は小泉内閣で首相秘書官を務めた後、安倍、菅、岸田の3内閣で内閣官房参事を拝命し、首相官邸仕事を続けてきた。議員秘書時代から数えれば、永田町生活も52年目である。新総裁が決まれば、10月初めには国会で首相に指名され、新内閣が発足することになる。そうすれば私もお役御免で、一般の年金生活者だ。

今年で52年になる永田町生活で、大きな心残りとなつてゐる。北朝鮮の拉致問題である。小泉首相に同行した2回の訪朝、そして、私自身が北朝鮮の要人たちと話し合った3回目の訪朝。この3回目の訪朝では、交渉の記録を雑誌に公開したこともあった。いろいろなことがあったが、いまだに北朝鮮に残る拉致被害者の帰国は実現できていない。岸田首相は、首相直轄のハイレベルな協議の意向を示していたが、目立った進展がないまま、退任することになったのは、本当に残念である。

私も自身は首相秘書官として2004年の第2回訪朝から帰国して以来、政府としての解決への取り組みには一切関わっていない。このときの北朝鮮側の回答が、拉致被害者の家族の方々の期待から大きく外れていたからか、小泉首相をはじめ政府側担当者の努力が認められず、帰国直後の説明会では家族や関係者の方から数時間罵声を浴び続けたことは、思い出すと今でもショックだ。しかし、拉致被害者の方々の帰国を実現



KDDI 八俣送信所 (茨城県古河市)

したいという気持ちは今でも変わらない。個人の立場でできる範囲で努力していきたいと思つている。独自の活動を続けている短波放送「しおかぜ」のことを思い出した。「しおかぜ」は北朝鮮にいる拉致被害者に向けてのメッセージを発信するためのラジオだ。

05年に放送を開始、日本語の「ふるさと風」と、朝鮮語の「日本の風」の2番組で、日本政府の取り組みや、日本や北朝鮮を巡る状況、拉致被害者への家族・友人からのメッセージ、日本の歌などを流している。現在は、茨城県内のKDDIの送信設備を使っているが、施設の老朽化で送信機が削減されたり、使えない時期があったり、問題が生じた。放送継続には、月に約325万円かかるという。

自民党総裁選、立憲民主党代表選と日本の政界のリーダーが交代する節目となったが、残念ながら拉致問題は大きな争点とはならなかった。総裁選告示日に、自民党本部で9人の候補者がそれぞれ立候補にあつた。この政策を述べた際、拉致問題について述べたのは、小林鷹之氏と加藤勝信氏の2人だけだった。

確かに今回の総裁選の争点は、政治とカネの問題への対応が一番重要だった。だが、拉致問題を担当する林芳正官房長官、上川陽子外相の現役閣僚には拉致問題に触れてもらいたかつた。そんな中で、小泉進次郎氏の発言が印象に残っている。北朝鮮の金正恩朝鮮労働党総書記との会談に向けて、「父親同士が会っている」「自分たちは同世代。今までのアプローチにとらわれず、前提条件なく向き合う新たな機会を模索したい」などと抱負を語っていた。「父親」「同世代」と他候補にないものをアピールしていた。

この学校で最高齢の現役歯科医師で、参加者諸君の親御さんなどが本学のOBならば「あの先生まだ生きていたのかい」と言われるだろうと、自己紹介をし、昭和の大戦争の空襲を体験した最後の世代だと、一面の焼け野原となった東京の写真と同じ地域の現在の写真を見せる。70年の歳月で世の中が凄まじく変わったこと、医療も時代の流れの中で大きく変貌したことを理解してもらつたためである。戦中戦後の混乱期にあつては、急性伝染病や結核(当時の最大死因)で死ぬ人が多かった。生命を脅かすことの少ない局所的疾患を対象とする歯科医療や眼科医療などが格下の医療と軽視されがちだったのも仕方ないことだったのだから。筆者も大学では「医者の使命はなによりも『救命』で、死に向かう人をたとえ1時間でも生き長らえさせる」と教育された。

第56回歯学体夏期大会 水泳部が個人種目で大活躍

第56回全日本歯科学生総合体育大会夏期部門は、7月31日(水)から8月13日(火)の日程で大阪大学歯学部的主管により全国各地で開催された。本学は11部門にエントリーして総合成績は28位だった。



個人種目で活躍が目立ったのが水泳部で、古俣海翔君(第1学年)が男子200m個人メドレーで入賞を喜び水泳部員



入賞を喜び水泳部員

ドレーで優勝、男子100m自由形で準優勝、新人戦の男子50mバタフライ、50m自由形で優勝、門司拓磨君(第1学年)が新人戦男子50m背泳ぎで準優勝と大活躍した。古俣君は小学生の頃からスイミングスクールに通い、高校でも水泳部に所属しており、県大会等で好成績を収めており、今大会で実力を発揮した。その他、小坂田賢悟君(第3学年)が男子100m平泳ぎと100mバタフライで5位、佐藤美夢さん(第2学年)が女子50mバタフライで5位、100mバタフライで4位、野崎優

君(第4学年)、丸山颯野君(第2学年)、小坂田君、古俣君と出場した男子4x50mフリーリレーでは8位と入賞し、水泳部門の順位を14位まで押し上げた。水泳部門は東京歯科大学が部門主管となり、8月3日(土)、4日(日)と千葉県国際総合水泳場で開催された。キャプテン

の野崎君は、「低学年の学生が頑張ってくれたので、リレーで入賞し、賞状をもらうことができ、後輩にとっても感謝しています。来年の歯学体に向けて、これからの1年間、勉学に励むとともに、水泳を通じて心身共に鍛えていきたいと思つています」と来年に向けて抱負を述べた。

比較解剖学のスライドも質問と共に供覧して下さつた。このような井出先生と学生との間での問答が展開される対面型講義が続き、学生達が井出先生からの質問に答えていく過程で知識が深まる様子が伺えた。次に舌骨上筋を例に取り上げ、ただの解剖学用語の暗記ではなく、位置関係、周囲の構造など立体的な視点から知識を整理し、理解することの重要性を力説された。

講義中、学生達は熱心に井出先生の言葉に耳を傾け、ノートを取り、特別講義に臨んでいた。特別講義終了後、学生を代表し伊藤公平君が挨拶し、「この度は私達のためにわかりやすく知識を深める講義をして下さり、ありがとうございます。この講義を生かして我々はさらに勉強し努力を致します。」と感謝の言葉を述べた。その後、井出先生を囲んで記念撮影をおこなつた。

講義を終えた井出先生は「一年ぶりに松本歯科大学に來学して学生さん達に講義ができて大変うれしかった。また、学生同士で協力し、勉強に励んでいる姿も印象的であつた」と感想を述べ、帰路に就かれた。今回の特別講義の内容を基に卒業と国家試験合格、そして将来の医療現場に向けて学生たちが継続して努力し続けることを期待している。

東京歯科大学理事長井出吉信先生が特別講義 咀嚼・嚥下のメカニズムを説く

9月19日(木)、東京歯科大学理事長井出吉信先生による特別講義が本館602教室において第6学年を対象に開催された。

この日の講義内容は「咀嚼・嚥下に関連した解剖学」で、まず冒頭のスライドにおいて日本の人口年齢分布の推移を示され、我々がこれから何を念頭に置いて臨床現場に臨む必要があるのかを投げかけられた。超高齢化社会を迎えた現代、加齢に伴う誤嚥性肺炎をいかに防ぐこ

とが重要になっていくかを伝え、そのためにも今回のテーマである咀嚼・嚥下のメカニズムの理解が不可欠であることを説かれた。

続いて咀嚼筋群や舌骨上筋群の正確な知識の理解を目指し、動画などの視覚教材も駆使し、繰り返し角度を変えながら講義が展開された。四大咀嚼筋の大ききの割合がネコ、ウマ、ヒトの間でどのような差があるか、その理由は何か、など興味深い

比較解剖学のスライドも質問と共に供覧して下さつた。このような井出先生と学生との間での問答が展開される対面型講義が続き、学生達が井出先生からの質問に答えていく過程で知識が深まる様子が伺えた。次に舌骨上筋を例に取り上げ、ただの解剖学用語の暗記ではなく、位置関係、周囲の構造など立体的な視点から知識を整理し、理解することの重要性を力説された。

講義を終えた井出先生は「一年ぶりに松本歯科大学に來学して学生さん達に講義ができて大変うれしかった。また、学生同士で協力し、勉強に励んでいる姿も印象的であつた」と感想を述べ、帰路に就かれた。今回の特別講義の内容を基に卒業と国家試験合格、そして将来の医療現場に向けて学生たちが継続して努力し続けることを期待している。

創立者の「視点」



原 浩 誌編集主任 特命教授

本年度、筆者は「1日体験入学」のお手伝いとして、その冒頭に短いお話をさせてもらつている。

この学校で最高齢の現役歯科医師で、参加者諸君の親御さんなどが本学のOBならば「あの先生まだ生きていたのかい」と言われるだろうと、自己紹介をし、昭和の大戦争の空襲を体験した最後の世代だと、一面の焼け野原となった東京の写真と同じ地域の現在の写真を見せる。70年の歳月で世の中が凄まじく変わったこと、医療も時代の流れの中で大きく変貌したことを理解してもらつたためである。戦中戦後の混乱期にあつては、急性伝染病や結核(当時の最大死因)で死ぬ人が多かった。生命を脅かすことの少ない局所的疾患を対象とする歯科医療や眼科医療などが格下の医療と軽視されがちだったのも仕方ないことだったのだから。筆者も大学では「医者の使命はなによりも『救命』で、死に向かう人をたとえ1時間でも生き長らえさせる」と教育された。

新しい歯科医療を求めて(4)

ところで、現代の日本人の最大死因は「悪性新生物(いわゆる癌)」となつているが、近年では肺炎が増加を続けている。高齢者の直接的死因となると、圧倒的に肺炎で、それも不潔な唾液の誤嚥によるものが多いとされている。

清潔な口腔を維持することは、現代の歯科医療者の責務であることを考えると、歯科医師の仕事は高齢者のQOLの確保のみならず、彼らの生命を守ることに直結しているのだ。加齢に伴ってさまざまな慢性疾患やフレイル(脆弱性)を合併している高齢者に安全な歯科医療を供給するために、これからの歯科医師には、半世紀前よりもはるかに高度な資質が要求されている。医師国家試験よりも歯科医師国家試験が大幅に難関化してしまつたのも当然なのである。厳しい勉学に耐える覚悟を固めて入学してほしいと求めている。話を結ぶことにしている。

日本口腔顔面痛学会主催 口腔顔面痛脳学習キャンプ in 信州 2024 開催

8月17日(土)・18日(日)の両日、全国から総勢32名の研究者が集まり、日本口腔顔面痛学会主催による「口腔顔面痛脳学習キャンプ in 信州2024」が本学図書館学生ホールと解剖学実習室にて開催され、生命活動の司令塔を担う脳の機能と構造について理解を深めた。



脳の実物標本を用いての実習風景

冒頭、日本口腔顔面痛学会理事長の小見山道先生(日本大学松戸歯学部クローンブリッジ補綴学教授)より挨拶があり、スタートとなった。

諸注意を受けた後、解剖学実習室へ移動し脳の実物標本を用いて実習がおこなわれた。脳と脊髄の全体から細部にいたる神経核や神経線維の構造と機能について観察と議論が熱心に交わされた。

実習に続き、慈恵会医科大学痛み脳科学センター客員教授の加藤総夫先生の講義も展開された。加藤先生は国際疼痛学会の用語委員などを歴任され、日本を代表する国際的に著名な脳と痛みの研究者である。講義テーマは「三叉神経脊髄路核-腕傍

核-扁桃体経路と痛覚変調性疼痛」で脳幹部に存在する腕傍核という神経核が情動の中核である扁桃体中心核と多くの連絡線維を持つていること、また顔面領域をはじめとする全身から痛み・感覚情報も腕傍核を経由する中継核になっていることを蓄積された研究データに基づいて紹介された。

一日目の最後は中華レストラン・スタダストにて会食と共にディスカッションする時間が設けられた。その中で、歓迎アトラクションとして、第5学年の田口雄大君と第6学年の三野耀執君のデュオによる「ハナミズキ」の歌唱と講師の加藤総夫先生のピアノと筆者のハモンドオルガンによるジャズセッションも披露され大変盛り上がった。

二日目は朝8時45分からスタート。日本疼痛学会理事長で愛知医科大学疼痛医学講座教授の牛田享宏先生に「痛みと身体症



脳神経の説明を受ける参加者

状化と脳」というテーマで講義をいただいた。高知大学医学部

や愛知医科大学で取り組まれている痛み治療や臨床研究についてわかりやすく解説していただいた。

その後、解剖学実習室に移動し、頭蓋骨標本を用いて脳神経の通過孔などを細部まで観察したり、紙粘土を用いて三叉神経節からの分枝を標本上で再現したりする実習を行った。さらに学生ホールで愛知医科大学痛み緩和外科・いたみセンター助教の西須大徳先生が「脳MRI画像と病態」というテーマでMRI画像より痛みをはじめとする

症状・病態を推論する実習講義も行われた。

西須大徳先生は慶應義塾大学医学部脳科口腔外科から愛知医科大学に移籍し、医科をはじめとする多職種連携を取りながら痛み治療に取り組まれている。

この二日間を通じ参加者は、体内・体外のあらゆる情報を統合制御し生命活動司令塔を担っている脳の機能と構造について理解を深め、各自の現場へと散会した。

有意義な時間であったことや

継続開催への期待などの多くの声寄せられた。

2025年12月4日(6日)まで筆者が大会長として東京ビッグサイトにおいて痛み関連学会「Japan Pain Week」を開催する予定となっている。その大会に向けた前哨戦ともいえるべき脳学習キャンプが本学の絶大な協力の下に実り大きく開催できた。

最後に、この紙面をお借りして、本学の皆さまに感謝申し上げます。

(副衛生学部長・聴学部 教授 金銀翼)

病院だより vol.60

訪問歯科診療に対応

地域連携歯科

スの問題などで歯科受診が叶わない患者さんも多くいらつしやいます。歯科治療をはじめとする口腔機能の維持管理は、食べることという機能ばかりでなく、生きる力やQOLの向上に寄与することが明らかになってきています。また、要介護高齢者における口腔清掃状態の悪化は、誤嚥性肺炎の原因にもなりますので、訪問歯科診療のニーズはますます高まっています。

地域連携歯科では、そのよう



嚥下内視鏡 (VE)

歯科医療はこれまで、外来を中心に行われ、その年齢階級別歯科受療率は、70〜74歳をピークとして、その後は急速に低下するという実態がありました。一方で、超高齢社会を迎え、歯科的な問題を抱えているにも関わらず通院できない、要介護を必要とする後期高齢者は増加の一途を辿っています。また、身体に障害をお持ちになつたり、長期の入院、交通アクセス

なニーズにこたえるべく、外来診療に加えて複数の介護施設や歯科のない医療機関に加え、在宅への訪問診療も行っており、予約診療に加えて依頼があれば急患でも柔軟に対応させていたいただいております。その件数は年々増加していますが、本年度は、訪問歯科診療用に、カーナビ搭載、バックモニター完備の乗用車を新規に購入していただき、患者さんのもとへ送ることなく安全に、フットワークもさらに軽くなり訪問歯科診療を行っています。診療内容は義歯、抜歯、修復治療、根管治療など多岐に渡り、基本的に外来で行う診療と変わりませんが、どうしても診療環境や設備、患者さんの状態によっては診療内容に制限があるため、その際には診療所の受診をお願いすることもあります。さらに、訪問歯科診療の現場では、摂食・嚥下に問題を抱える方も多く、専門的な摂

食・嚥下リハビリテーションも並行して行うことで、誤飲や誤嚥の防止、摂食機能の向上の支援も行っています。

訪問歯科診療を行うにあたっては、医師、看護師、歯科衛生士、介護職員、理学療法士、作業療法士、栄養士などの多職種との連携を大事にしながら診療にあたっております。また、自治体や地域歯科医師会、医師等とも連携をとりながら、広い信州を網羅する訪問歯科診療のネットワークの構築を進めております。



訪問歯科診療に出発

(地域連携歯科学講座 講師 富士岳志)

「コミュニケーションの大切さを語る」

杉野臨床研修歯科医が塩尻志学館で講義

今年の2月本学を卒業し、国家試験に合格、4月より臨床研修歯科医として本学大学院に勤務する杉野凛太郎先生(47期生)が、9月12日(木)と13日(金)に塩尻志学館高校で「社会福祉の担い手 コミュニケーションの大切さ」ご自身の経験から福祉を学ぶ高校生へ」と題し、読み取り通訳を介して手話で3回講義を行った。

同校総合学科生活福祉系列の「社会福祉基礎」の授業では、福祉の見方、考え方を身につけるための学びを通して「いろいろな人と共に生きる(共生社会)」について考え、福祉の知識や技術を身につけ、それらを活用しながら共生社会の一員として行動できる人材を育成することを目的としている。そこで、杉野先生を講師として招き、「自身の経験から学校生活におけるコミュニケーションの大切さ」や「歯科医師を志したきっかけや現在のやりがい」についての講義を依頼した。

13日の午後2時からの講義では、2、3年生21人の生徒

に「もし自分の耳が聞こえないなかつたら、今と同じ人生を歩めていましたか? 耳が聞こえなくて困るのはコミュニケーションです。自分だったらどうするのか、講義を聞きながら考えてください」と問いかけから始まりました。

杉野先生は、生まれた時から音に全く反応しなかったため、1歳になる前に病院で検査を受けたところ、感音性難聴と診断された。感音性難聴は内耳や聴神経の機能が不全で、音の電気信号がうまく伝わらないのが特徴で、補聴器をつけても音が歪んで聞こえるため、相手の声が「音」として分かっていても「言葉」として入ってこない。言い換えれば、補聴器をつけても音声でコミュニケーションすることが難しいと説明した。

両親について触れ、まさか自分の息子の耳が全く聞こえないとは思っておらず、当時はインターネットがあまり普及していなかったため、本屋で手話聴覚障がいに関する本を全部買い、調べ、色々な人に相談し、子育ての方

法を模索していたと苦労の様子を語った。聾者にとって、母語(人が生まれてから最初に身につく言語。物事を考える際にベースとなる言語)すなわち第一言語の獲得が最初の大きな壁であった。今では仲のいい台湾人学生などと手話でコミュニケーションを取っている。

コミュニケーションというのは、相手の言葉だけではなく、相手の特性、生まれ育った環境を思いやりながら対話を積み重ねていけば、より良いものになる。6年間の学生生活を通して、自然体でお互いに認め合えば、国籍、障がいの有無は関係なく、深い信頼関係を築けることがわかり、達成感も大きいと語った。

最後に、自分のハンディキャップをどういうふうに使え、どう向き合ってきたかで、違いが生まれてくる。様々な人とのコミュニケーションを通して、様々な生き方を学び、自分の個性を大切に、将来に役立てて欲しいと生徒たちにアドバイスをした。

聴講した生徒は、「言語が違ってても、相手を思うことができたらコミュニケーションがとれることを改めて知った」「手話ができればコミュニケーションをとれる人も増えるので覚えた」と話していた。



手話で講義をする杉野先生

Alumni News

松本歯科大学校友会

兵庫県支部

総会・学術講演会・懇親会を開催 矢島安朝特任教授が講演

ついで報告した後、「コロナ禍が明け、通常の日常を取り戻しつつあるなかで支部総会も対面で開催でき、またこの後の懇親会でも兵庫県歯科医師会・兵庫歯科医師連盟を、校友会本部から、来賓をお招きし開催できることを嬉しく思う」とあいさつした。



校歌を熱唱する上月康司先生（中央）

議長に上月康司先生（8期生）、議事録署名人に平井（筆者）が選出されたあと、議事に先立ち、前回総会以降にお亡くなりになられた大石陽先生（4期生）（8月5日）への黙祷が捧げられた。報告事項では各担当者から報告がなされ、議事では4議案が提出され、審議された後全ての議案が滞りなく承認可決された。引き続き午後5時から学術講演会が開催された。矢島安朝特任教授（松本歯科大学銀座8丁目クリニック院長）を招き、「超高齢化社会におけるこれからの医療を考える」と題して、高齢化社会、健康寿命、要介護高齢者におけるこれからの歯科医療の展望とインプラント治療における最新技術や医療事故の

事例をもとにインプラント埋入時に注意すべき点、これから始まる国民皆歯科健診などの最新トピックスを交えながら解り易く解説していただき、その後の質疑応答ではインプラント治療に関する質問や超高齢化社会に適切する歯科医療についての疑問などを時間が足りないくらい交わされ、矢島特任教授にはご自身の経験やお考えを懇切丁寧にご回答いただき非常に有意義な学術講演会となった。

午後7時から懇親会が開催された。平田尚也当代会理事（22期生）の司会では、岩本雅章副支部長（12期生）が開会の辞を述べ、中野支部長の挨拶後に、ご臨席いただいた梅村智恵副会長、菅原正之郎支部事務理事、中坪信也支部連盟副会長、矢ヶ崎雅枝校友会頭・会長として先ほど講演いただいた矢島特任教授が紹介された後、梅村副会長、中坪支部連盟副会長、矢ヶ崎会頭・会長が来賓を代表

して挨拶をされた。岩本正支部顧問（10期生）による乾杯の発声のもと、京都俳優の孔得偉氏による音楽に合わせた変面ショーのパフォーマンスが披露された。変面とは、手や扇子を顔にかざした瞬間、顔（顔の隈取り）が次々と変わっていくものであり、どのような仕組みで、お面を変えているのかは秘密とされている。得意な京劇の動きを用いた独特の振り付けで、それぞれの面の性格や感情を豊かに表し、細部まで工夫を凝らした表現力と身体能力で魅了された。中盤には矢ヶ崎会頭・会長から現在の大学の状況や新入生募集について詳しく説明がなされた。



最後に矢ヶ崎会頭・会長と上月先生を筆頭に全員で校歌を斉唱した後に松川茂当代会副会長（11期生）の閉会の辞と坂本浩当会参与（10期生）の一本締めで閉会した。

（46期生 平井崇七）

8月10日（土）午後4時からANAクラウンプラザホテル神戸で令和6年度定時総会が開催された。

前田和昭当会専務理事（13期生）の開会の辞では、中野訓夫支部長（11期生）が第45回本部総会も5年ぶりの対面での現地開催であったことや国家試験の結果と本学の現状などに

先生のご研究で発見・同定されている。その研究史の中で、現在世界を震撼させている劇症型溶連菌の世界初の全ゲノム配列の決定において僅差で米国の研究グループに後れを取ったという苦労を語ってあったが、当時、劇症型溶連菌に着目する慧眼には目を見張るものがあった。セミナー終了後の質疑応答の場でも議論は尽きず、大変有意義な時間となった。

本セミナーは微生物・感染症学研究の面白さを堪能する機会であり、研究の歴史はヒトの歴史であることを再確認する場であった。日本の近代微生物学はコッホに師事した北里柴三郎に始まるが、川端先生のこれまでの研究成果は微生物学・感染症学の歴史のピースとしてそこに続くことが十分に予見できるものであった。

（微生物学講座 教授 吉田明弘）

「超高齢化社会におけるこれからの医療を考える」と題して、高齢化社会、健康寿命、要介護高齢者におけるこれからの歯科医療の展望とインプラント治療における最新技術や医療事故の

最後に矢ヶ崎会頭・会長と上月先生を筆頭に全員で校歌を斉唱した後に松川茂当代会副会長（11期生）の閉会の辞と坂本浩当会参与（10期生）の一本締めで閉会した。

（46期生 平井崇七）

大学院セミナー 大阪大学大学院 微生物学講座 教授 川端重忠先生 レンサ球菌感染症の歴史・疫学・病原因子について

大阪大学大学院歯学研究所微生物学講座教授の川端重忠先生をお迎えし、「レンサ球菌感染症の歴史、疫学、およびその病原因子」という演題でご講演いただいた。

冒頭では、感染症の歴史について、感染症とその時代背景や文明との関連についてお話した



レンサ球菌について解説する川端教授

続いて話は川端先生ご自身の研究史へと展開していった。川端先生はレンサ球菌研究の泰斗であり、教科書に掲載されているほとんどのA群レンサ球菌の病原因子の同定、機能解析を行われてきた。現在、世界中の医学学生・歯学生が必ず学ぶA群レンサ球菌の病原因子が川端

先生のご研究で発見・同定されている。その研究史の中で、現在世界を震撼させている劇症型溶連菌の世界初の全ゲノム配列の決定において僅差で米国の研究グループに後れを取ったという苦労を語ってあったが、当時、劇症型溶連菌に着目する慧眼には目を見張るものがあった。セミナー終了後の質疑応答の場でも議論は尽きず、大変有意義な時間となった。

本セミナーは微生物・感染症学研究の面白さを堪能する機会であり、研究の歴史はヒトの歴史であることを再確認する場であった。日本の近代微生物学はコッホに師事した北里柴三郎に始まるが、川端先生のこれまでの研究成果は微生物学・感染症学の歴史のピースとしてそこに続くことが十分に予見できるものであった。

（微生物学講座 教授 吉田明弘）

NEW FACE

本年度に新しく職員 の仲間入りをされた本 学病院で働く歯科衛生 士さんをご紹介します。



坂井 歩さん
松本市出身

歯科衛生士をめざすきっかけとなったのは、母が歯科助手として働いていたことです。幼少期から母の仕事を見て育つ中で、歯科の世界に興味を持つようになり、口唇ケアを通じて全身の健康を守ることができるといふ点に強く惹かれ、この道を志しました。ま

た、開業医からの紹介状を持参して来院される患者さんの多様な症例を学びたいという思いもあり、日々の業務を通じて知識を深めることに励んでいます。

歯科衛生士として働く中で特にやりがいを感じるのは、患者さんから「ありがとう」と感謝の言葉をいただける瞬間です。また、自分が学んできた歯の健康に関する知識を活かし、患者さんに正しいケア方法を教えられることにも喜びを感じています。患者さんが治療後に、笑顔で帰っていく姿を見るたびに、この仕事を選んで良かったと感じます。

趣味はアニメ鑑賞で、日々の忙しい中でリフレッシュする大切な時間です。これからも患者さんに寄り添い、信頼される歯科衛生士をめざして努力を続けていきたいと思っています。

「Giving Campaign2024」に本学も参加
学生団体に直接寄付を行う事ができます
公式サイト: <https://giving-campaign.jp>
2024年10月11日(金)~20日(日)まで全国一斉開催



2025年度入試より
インターネット出願開始

2025年度入試より、インターネット出願となります（留学生選抜・編入学選抜を除く）。文部科学省の調べによりますと、約9割の大学がインターネット出願を行っているとのこと

インターネット出願により、出願書類を取り寄せなくていいため、出願締切ギリギリまで申し込みが可能です。また、入学検定料も今までは銀行振込のみでしたが、クレジットカード決済やコンビニエンス支払いなどが可能となります。

10月26日（土）には総合型選抜（I期）が実施され、10月7日（月）より出願が開始されます。本学ホームページの入試情報サイトより、インターネット出願のボタンをクリック。インターネット出願サイトより出願日になりましたらマイページに登録していただき、出願手続きを行ってください。多数の出願をお待ちしております。

Matsumoto Dental University SNS Information



LINE



X



Instagram



facebook



作品募集!
10月10日(木)まで
9:00~10:00
10月10日(木)まで
10:00~10:00

- 11日(金) 合格発表
- 11日(金) 防火・防災・消火訓練 (大学病院 学生避難誘導訓練 歯学部衛生学院)
- 23日(水) 発表・表彰 11月16日(土)
- 23日(水) お問い合わせ先 松本歯科大学社会貢献・地域連携推進センター (庶務課内) 0263-51-2188
- 26日(土) 総合型選抜(I)・編入学選抜(I)
- 27日(日) 留学生選抜(C)
- 27日(日) 体育祭
- 27日(日) 一日体験入学 (歯学部)

受験生の皆さんへ
見せてほしい 君の個性 君の情熱

総合型選抜 (I期)

試験日 10月26日(土)
出願期間 10月7日(月)~10月23日(水)

一日体験入学

① 10月6日(日) ② 10月27日(日)
※10月開催のみ掲載

開催時間 9:30~15:00 (受付 9:00~)

●キャンパスツアー ●ランチ体験
●模擬実習 ●入試説明・進学相談 など

※参加希望の方は、本学ホームページまたは下記までご連絡ください。

お問い合わせ

HOT LINE 0263-54-3210
松本歯科大学 入試広報室
www.mdu.ac.jp